

## 貝原益軒と太宰府

貝原益軒は、江戸時代前半の儒者・博物学者・教育家です。寛永7年（1630年）に福岡城下に生まれました。益軒の著作は『養生訓』や『大和本草』が有名ですが、太宰府の歴史に関わるものもいくつか残されています。

貞享元年（1685年）に著わされた『太宰府天満宮故実』はそうした著作の一つです。益軒の太宰府天満宮に関する著作は、福岡藩の地誌である『筑前国続風土記』の太宰府地域に関する記述と共に、江戸時代後半の青柳種信や上野勝従らにつながる太宰府研究の先駆けになるものと評価されています。

なぜ儒者である益軒は太宰府天満宮に関する研究書を著わしたのでしょうか。背景の一つに、益軒の菅原道真への崇敬の念がありました。『太宰府天満宮故実』の序文では、この著作が「本朝の儒宗（道真のこと）を尊崇し、その遺事を編みて、これを後世に顕わす」ものだと評されています（原文漢文）。益軒にとって菅原道真は「本朝の儒宗」、すなわち日本の儒者の第一人者として位置付けられたのでした。『太宰府天満宮故実』では、怨霊思想に基づく怪異などが儒教的な論

## 太宰府人物志

資料室だより ⑥

理（「天」の思想）から否定されていますが、これも道真を「儒宗」と捉える思考のあらわれといえるでしょう。

また、この時期の益軒と神道との関わりも重要です。『太宰府天満宮故実』に相前後して、「神儒併行不相悖論」という文章が書かれます。これは神道と儒教の考えが本質的に矛盾しないことを唱えたもので、益軒がどのように日本古来の神道思想を捉えようとしたかを示しています。地域に根付いた宗教や習俗を儒教的な立場からいかに統一的に理解するかは、福岡藩の儒者である益軒にとって大きな問題であったと考えられます。

もつとも日常の生活では、益軒は気軽に太宰府の歴史と自然と楽しんでいたようです。益軒の日記からは、彼がしばしば天満宮や観世音寺に参詣し、宝満山などを訪れていたことがうかがえます。宝永3年（1706年）春には、妻の東軒らと共に天満宮で雅楽の奉納演奏もしています。この時、益軒は喜寿の77歳。平安の菅原道真の時代を偲びながらの演奏であったと思われる。

市史資料室 古賀 康士